

## 『労働者』（抄訳）

エルンスト・ユンガー 著  
川 合 全 弘 訳

〔訳者まえがき〕

本稿は、前稿「部分の総和を超える、全体としての形態」（産大法学三九巻三・四号）に引き続き、エルンスト・ユンガーの形態論を考察するための基礎資料として、彼の著作『労働者』の第一部第四章、第五章（一三〇～一三二節）を試みに訳出したものである。

前稿と同様、底本は次の初版を用いた。Ernst Jünger, *Der Arbeiter. Herrschaft und Gestalt*, Hansische Verlagsanstalt, 1932, SS. 46～66. 強調のために著者が隔字体で表記した箇所は、本稿では太字のゴシック体で表した。

## 市民的空間への根源的な諸力の侵入

### 一三

ここまでの叙述においては、根源的なものと自由と権力とに対する新しい関係が労働者に特有であるということを、前提としてきた。

生活空間を密閉して根源的なものの侵入を遮断しようとする市民の努力は、安全を求める大昔からの努力の、特に成功を収めた事例である。このような努力は、いたるところに、自然史にも精神史にもそれどころか個々のどんな生命体にも、見出されうる。この意味において市民という現象の背後に潜んでいるものは、どんな時代にもそしてどんな人間にも内在する、永遠の可能性なのである。このことは、どんな時代どんな人間にも攻撃と防御という永遠の形式が——そのいずれの採用を決めるかは全く偶然でないにせよ——備わっているのと同様である。

市民は最初から防御に頼らざるをえず、城の壁と都市の壁との間には、最後の防衛手段と**唯一**の防衛手段との相違が表れている。ここに示唆されているのは、なぜ市民的政治において弁護士身分が初めから特別の役割を演じるのかということであり、また同様に、国民民主主義国間での戦争に際して、なぜどちらが攻撃された側なのかということが論議的になるのかということである。左手は防御の手である。

市民は、運命をすすんで闘争と危険の中に捜し求めるよう、自らが促されているとは感じないであろう。というのも、根源的なものは市民の範囲の外にあり、不合理なものであると同時に不道德なものそのものにほかならないからである。そこで市民は、それが自分の前に権力と情熱として現れるか、それとも火、水、地、風の元素ウァエレメントの形をとって

現れるかに関わらず、常にそれから離れようとする。

この視角から見れば、世紀変わり目の頃の大都市は、安全の理想的な城塞として現われる。すなわちそれは、一世紀以上も前に古めかしい環状堡壘を放棄して、石やアスファルトやガラスによって生活を蜂の巣状の秩序に包み込み、いわば生活の最も内奥の秩序の中にまで侵入した、壁そのものの大勝利として現われる。技術の勝利はここでは常に快適さの勝利であり、自然力（エネ、ト）の導入は経済によって決められる。

しかし市民時代の法外性は、安全を求める努力それ自体にあるというよりも、むしろこの努力に特有の排他的性格にある。換言すれば、それは、根源的なものがここでは無意味なものとして現われ、それゆえ市民的秩序の境界壁が同時に理性の境界壁ともなる、という点にある。これによって、市民は他の諸々の現象から、例えば信仰者や戦士や芸術家や船乗りや猟師や犯罪者などの現象から、そして先に述べたように労働者の現象からも、区別されるのである。

ひょっとしたらすでにこの点に、市民がこれらの異質な現象に対して感じる嫌悪の理由が明らかとなっているのかもしれない。それらは、言わばそれらが纏う衣装からして、危険なもの匂いを都市に持ち込むからである。これらの生活態度が単に眼の前に現われるだけで生まれる嫌悪は、理性に対する攻撃への嫌悪ではなく、むしろ理性の崇拜に対する攻撃への嫌悪なのである。

市民的思考の術策の一つは、理性の崇拜に対する攻撃を理性に対する攻撃と言い立て、そうすることによってそれを非合理として片付けることを目的としている。これに対して言われるべきことは、労働者の市民版が存在するのと同様に、特殊市民的な理性もまた存在するがゆえに、このような二種類の攻撃の一致が成り立つのは、市民的世界の内部においてだけであること、これである。特殊市民的な理性の際立った特徴は、まさしくそれが根源的なものと相容れないという点にある。しかしこのような特徴は、先に示唆したような諸々の生活態度には決して当てはまらない。

それゆえ戦いは戦士にとって高度な秩序において遂行される出来事であり、悲劇的葛藤は詩人にとって生の意味がりわけ明瞭に把握されうる状況であり、炎上する都市や地震によって荒廃した都市は犯罪者にとって格好の活動の場である。

同様に信仰を持った人間は意味深い生の広い範囲に関与する。運命は、奇蹟によっても不幸と危険によっても、信仰者を一層強く支配下に引き入れる。このような介入の感覚は悲劇において認められる。神々は自然力の姿をとって、例えば輝く星辰、雷鳴と稲妻、炎によっても焼失しない燃える茂みなどとして現われることを好む。全世界が神々と人間の戦いの下で轟音に包まれるとき、ゼウスは至高の玉座にあって喜びに打ち震える。なぜならゼウスはこのとき自らの権力の全体が力強く証明される様を見るからである。

根源的なものに対する人間の関係には高次のものもあれば低次のものもあり、安全と危険がともに同一の秩序の中に含まれるような局面は数多く存在する。これに対して、市民は、安全を最高の価値として認識し、これに従って自らの人生活路を決める人間として把握されうる。

市民がこの安全を保障してくれるための最高の力と認めるものが、理性である。市民が理性の中心に近づくにつれ、危険なものも潜む暗い影は消えていく。天空を曇らす雲のかけらもほとんどないように思われる時代には、危険なものもしばしばはるか彼方に至るまで消滅する。

しかしそれでもやはり危険は常に存在する。危険は、秩序が自らの周囲に築く堤防を、自然力のごとく絶えず突き破ろうとし、また、秩序が危険をよく排除すればするほど、危険は、秘められてはいるがしかし確固とした数学の法則に従って、一層その圧力を強め、ますます恐ろしいものとなる。というのも、危険はどんな秩序にも関与しようとするばかりでなく、市民が決して関知できないあの最高の安全の母でもあるからである。

他方、進歩が到達しようと努める安全の理想状態は、——危険なもの、源泉を単に減少させるとどまらず、最終的にはそれをことごとく干上がらせてしまはずの——市民的理性の世界支配にある。これを成就する行為は、まさしく、危険なものを理性の光の中で無意味なものとして開示するとともに、現実に対するその権利要求を否認する、ということの内容とするものである。この世界において重要なことは、危険なものを無意味なものに見なすことであり、危険なものは、理性の鏡の中で誤謬として映じた瞬間に、克服されることになる。

このことは、市民的世界の精神的秩序と事象的秩序との内部においていたるところで詳細に実証されうる。それが示されるのは、概括的に言えば、序列に依拠する国家を、平等を基本原理とし、理性の行為によって自らを基礎付けてきた社会として見ようとする努力においてである。それが示されるのは、外政と内政の危険のみならず私生活の危険をも均等に分散させることによってそれらを理性の管理下に置くことができるとする、保険制度の包括的な構築、すなわち運命を確率計算によって解消しようとする努力、においてである。さらにまた、それが示されるのは、心の生活を原因と結果の連鎖として認識することによって、それを計算不能の状態から計算可能の状態へと変換し、意識の支配圏に編入しようとする、数多くの非常に手の込んだ試みにおいてである。

この空間の内部におけるあらゆる問題設定は——芸術的なものであれ、学問的なものであれ、あるいは政治的なものであれ——、紛争は避けうる、という結論に帰着する。それにもかかわらず、たとえば戦争や犯罪のような恒常的な事実、に直面したときにどうしても無視できないように、もし紛争が出現するとするならば、重要なことは、それを、教育や啓蒙によってその再現を避けうる誤謬として証明することなのである。このような誤謬が出現するのは、単に、あの大きな計算の様々な因数が、まだ一般に知られるところとなっていないからに過ぎず、この計算が正しく解かれるならば、根本的に善良で根本的に理性的であり、そしてそれゆえに根本的に安全な単一の人間性を備えた、地球人口が誕

生する、とされる。

このような見通しの説得力に対する確信が、啓蒙が自らに備わる力を過大評価してしまいがちである理由の一つである。

訳註

① 原語は“Erscheinung”である。この文脈で「現象」という訳語を用いることには、日本語の用法の点でやや違和感を覚える。しかしこの語が本書の他の箇所でもしばしば用いられ、その際著者の用語法に一貫性が見られること、そして著者が本書の「まえがき」において、「本書が重視するものは新しい思想や新しい体系ではなく、むしろある新しい現実であるので、全ては、囚われのない十分な視力を持つ眼を前提とした、記述の鋭さに懸かっている」(S. 11)と述べているように、著者の目標が思弁による本質の把握ではなく、むしろ眼に見える姿や形の凝視にあることなど、諸々の事情を考え合わせて、さしあたり本稿ではあえてこの訳語で通した。

なお、“Erscheinung”ばかりでなく、“Gestalt”という本書のキーワードをどう訳すかということも難題である。訳語を確定するためには、これらの語の背後に潜む著者の問題意識を理解することが必要である。この関連でさしあたり思い浮かぶことは、シュベングレーを経てゲーテにまで遡る形態学的思考の系譜の、ユンガーによる受容である。ユンガーは、第一次大戦の終結直後からゲーテの作品を集中的に読んでおり、またシュベングレーの著作にも早くから通じていた。さらにまた動植物研究、とりわけ昆虫の採集と観察は、幼時から晩年に至るまでユンガーが維持した仕事であり生活習慣であった。昆虫の形態観察は、ユンガーにとって自然の神秘的な不滅性を感得する最重要の方法にほかならず、このような発想法が本書の背景にも存在しているように思われる。

根源的なものが常に存在するということを、我々はすでに見た。その排除が高度に達成されることがありうるにせよ、根源的なものは實際単に外部の世界に属するばかりでなく、どんな個人も現存在にも失われることのない持参金として割り当てられてもいる以上、この排除にはやはり一定の限界がある。人間が根源的に生きるのは、人間が自然的な存在であるからであるのと同様、デモーニッシュな存在でもあるからである。理性の推論が心臓の鼓動や腎臓の働きを代用することは決してできないし、また、理性自身も含めて、ときに生の下劣な情熱や偉大な情熱に服することのないものなど存在しない。

根源的なものの源泉は二種類存在する。それはまず、海が最も穏やかな風のときにも危険を秘めているのと同様に、常に危険である世界の中に存在する。第二にそれは、遊戯と冒険、憎悪と愛、勝利と没落に憧れ、安全のみならず危険をも必要と感ずる人間の心の中に存在する。このような心にとって、完全に保護された状態は、当然ながら**不完全な状態**と映じる。

さて、根源的なものがどの程度遠くまで後退するように見えるかということが、市民的な評価の支配が及ぶ範囲を示す尺度となる。**見える**と言うのは、市民的世界の中心においてさえ、根源的なものが無害さの仮面を纏って潜んでいることがありうるということ、後に見ることになるからである。さしあたり確認されるべきことは、生まれながらの防御者の眼には、根源的なものが奇妙な防御陣地の中に、それも**ロマン主義**の防御陣地の中に現れる、ということである。それは、人間においてはロマン主義的な態度として現れ、世界においてはロマン主義的な空間として現れる。

ロマン主義的空間には固有の中心が存在しない。というのもロマン主義的空間はもっぱら投影の中にか存在しない

からである。ロマン主義的空間は市民的世界の影の中に存在し、市民的世界の光源がその広がりやを決定するばかりか、何時どこでも、容易にそれを解消することもできる。このことは、ロマン主義的空間が決して眼の前には現れないこと、それどころか遠さがその本質的な特徴と見なされながら、しかもこの遠さを測る尺度は現在から採られていることに、表現されている。遠と近、明と暗、昼と夜、夢と現実とは、ロマン主義的な位置確認法の尺度を意味する。

時間的な現在からの遠さにおいて、ロマン主義的空間の位置は過去として、それもその時代の現状に対する反感（ルサンチマン）によって色づけされた過去として現れる。空間的な現在からの遠さは、徹底して保護され意識によって浸透し尽くされた空間からの逃避として表現される。それゆえ、意識の最も鋭い手段としての技術の凱行進とともに、ロマン主義的な光景の数は減少してゆく。それらは、昨日にはまだひょっとして「遠くトルコに」あるいはスペインとギリシャに存在し、今日にはまだ赤道付近の原生林帯や両極の氷冠帯に存在するかもしれないが、しかし明日には人間の憧れが投射されたこのような驚異の地図に残る最後の空白箇所も消し去られることになる。

我々にとって大切なことは、中世の鐘の音や異国の花々の香りを非常に愛情深く魔法で呼び出すことができるという意味において驚異的なものが、劣勢に置かれた者の逃げ口上に属する、ということを知ることである。ロマン主義者は根源的な生の評価を導入しようとする。彼はこの生の妥当性にうすうす気づいているものの、それに自ら参与しないので、結果として欺瞞や幻滅が生じざるをえない。彼は市民的世界の不完全さを認識するものの、それに対して逃避以外の手段を対置できない。しかしながら実際に資格のある者は、どんな時どんな場所においても根源的な空間に立つのである。

しかし我々がこの目で見たものは、危険なものや異常なもの最後の名残りを珍品として保存してあるような自然保護公園を作り出そうとする努力において市民的世界の勝利が表現されるといふ光景であった。イエローストーン公園で



最後のバッファローを保護することと、別の世界との取り組みを任務とする多種多様な人間集団を養うこととの間に、大きな違いは全く無い。

ロマン主義的空間が蜃気楼のあらゆる特徴を伴いつつ遠さの中に現れるように、ロマン主義的態度は抗議として現れる。根源的なものに対する人間のどんな関係もロマン主義的才能として表現されるような時代が存在する。この才能には、破綻限界が予め設定されている。この破綻が、遠さ、陶酔、狂気、困窮、あるいは死の、何れへの墜落として現れるかということは、偶然に因る。これら全ては、個々人が、逃げ道を求めて精神的身体的世界をぐるっと走り終えた後に武器を横たえる、逃避の諸形式にほかならない。このような武装放棄は、沈没しつつある船からもう一度闇雲に片舷斉射が行なわれるように、時に攻撃の形式をとって現れることもある。

我々が再び学んだことは、絶望的な哨所で斃れた歩哨の価値を認識することである。偉大な名前と結びつく多くの悲劇がある一方で、それとは別の、名も無き悲劇がある。そのような悲劇には、毒ガスの攻撃を受けた折のように全階層が打撃を受け、生きる意欲を奪われてしまう。

市民は、危険なものなど全く存在せず、経済法則が世界とその歴史とを支配していることを冒険的心情の持ち主に説得することに、ほとんど成功を収めてしまった。夜と霧の日に両親の家を見捨てる若者たちに、彼らの感情はこう告げる。危険を求めるためには、全く遠くへ、海を越え、アメリカへ、外人部隊へ、胡椒の育つ国々へ脱出しなければならぬ、と。こうして、自己自身の卓越した言語を敢えてほとんど話そうとしない人々の現象が可能となる。例えば、——嵐のために創られた力強いその翼が、無風の異質な環境の中では絶えざる好奇心の対象にしかかならないアホウドリにも喩えられうる——詩人という現象や、あるいは——小売商の生活に吐き気を催してしまいがゆえに、ごくつぶしとしか思われない——生まれながらの戦士という現象がそれである。

世界大戦の勃発はこのような時代に、長く赤い終止線を引く。

戦争を歓迎する志願兵の歓声の中に存在するものは、一夜にして眼前に新しく危険な生活を迎えた心情の解放だけではない。そこに同時に潜んでいるものは、回復不能なまでにその妥当性を擦り減らしてしまった古い価値判断への、革命的な抗議でもある。ここから、ある新しい根源的な色合いが思想、感情、事実の動向の中に流れ込む。もはや価値の転換に取り組むことは不必要となった。新しいものを見、それに参与することで十分である。

この瞬間から、根源的な空間とロマン主義的な空間との見かけ上の一致も、まことに奇妙な仕方ですれれる。——天災の襲来に遭ったかのように他の全ての人が狼狽しているように見えるときに自発的に行動する——最も深い意味において活動的な階層の抗議は、もちろんその観念的な表層においては、さしあたりまだロマン主義的な空間を引き合いに出す。しかしながらそれは、同時に現在を、疑う余地のない今とここを志向してもいることを通じて、ロマン主義的な抗議と区別される。

そのときただちに判明することは、遠さや過去によって供給される力の源泉、例えば冒険的な夢想のそれや因習的な愛国主義のそれが不十分なものになってしまう、ということである。戦闘の現実には別の蓄えを要求するのであり、戦場に向かう部隊の熱狂と物量戦の弾孔地における彼らの行動との間に開示されるものは、二つの世界の相違なのである。それゆえ、このような出来事をなおも何らかのロマン主義的なパースペクティヴから観察することもまた不可能となる。何らかの仕方ですれに関与するためには、ある新しい独立性に与らねばならない。その現象は、一九世紀の諸々のカテゴリーに含まれていたのとは異質な、賛否の知識を要求する。

ここではロマン主義的抗議の妥当限界も非常に明白に露呈する。ロマン主義的抗議は、言い逃れとして存在した限り、そしてまた沈みゆく世界への異議として存在し、そうであるがゆえにそれへの無条件的な従属の下に存在した限り、ニヒリズムを宣告される。しかしながらロマン主義的抗議は、その下に真の英雄的遺産を、愛を秘めていた限り、ロマン主義的空間を越えて力の領域へと移行する。

同一の世代が、一方で戦争によって碎かれてしまい、他方で死や炎や血の大いなる接近を通じて従来けっして感じられたことのないある健康に与るようになるという、外見上矛盾する結果に到達しえた秘密は、ここにある。世界大戦は二つの国民集団の間で遂行されただけでなく、二つの時代の間でも遂行されたのであり、この意味においてわが国には勝者も敗者も存在するのである。

ロマン主義的抗議から行動——その標識はもはや逃避ではなく攻撃である——への移行に対応するのは、ロマン主義的空間から根源的空間への変化である。最遠の辺境に追放されていた危険なものが、大変なスピードで中心に逆流してくるように思われることによって、この過程は達成される。かくして世界大戦のきっかけがヨーロッパの周縁において政治的薄明の雰囲気の中で生じたことは、単に偶然ではない。

緊張に満ちたこの時代にあっても、最初の稲光を生む悪天候は外部にある。しかしながらこれ以後、秩序の安全地帯が、久しく乾燥状態に置かれてきた火薬のようにひとりでに発火し、未知のもの、異常なもの、危険なものが、単に見慣れたものとなるばかりでなく、いつも身近にありもするものとなる。休戦が、紛争を見かけだけ終らせはするが、実際にはヨーロッパの全ての国境を、新しい紛争システムの柵で取り囲むことによって脆弱なものにした後には、破局が、変化してしまった思考のアプリオリと思われるような状態だけが残される。

このような経過に対応して、古い意味における秩序の概念がいまやロマン主義的な概念となりさえする。市民はなん

とかして古き良き戦前期に生きようとし、かくして、ユートピア的となった安全<sup>1</sup>への逃避を通じて全く危険な現実から逃れようとする人間として映じるようになる。インフレーションの折にもまだしばらくの間、使い馴染んだ貨幣が使用されるように、市民は旧来の努力を継続するものの、市民的評価はもはや通用しなくなっており、安寧秩序、民族共同体、平和主義、経済融和、協調などのスローガンの背後に、要するに一九世紀の理性への最後の訴えの背後に、いちだんと衰弱した態度が潜んでいることは見紛いようがない。これらは市民的復古のボキャボラリーに属する。市民的復古の体制は、軍備の継続的先鋭化の現実の上に仮初の薄いベールのように被せられている点で、平和条約と類似している。

過去と遠さの印の下に現れた危険なものが、今や現在を支配する。それは、さながら未知の法則性の軌道に従って宇宙の深淵から再来する恐ろしい天体のごとく、太古の時代と遠方の空間とから現在の中に侵入してくるように見える。進歩の精神も、内心において決断を前に怯む指導層の熱に浮かされたような努力も、闘争の発生を妨げることとはできなかった。闘争は、それが実際に行なわれるところでは、いくらその手段が改良され洗練されたとしても、常に、人間の人間に対する闘争として現れるし、将来もまたそうであろう。これこそ、なおわずかに人間の記憶の中や南アメリカの大原生林の中に活き活きと保たれてきた、太古の諸形式である。砲火によって寸断され、たっぷりと血を吸い込んだ大地から、亡霊がたち現れる。それは、大砲の沈黙によっても放逐されず、むしろ奇妙な仕方では既存のあらゆる価値判断の中に流れ込み、それらに変化した意味を与えるのである。

これを、ある者は近代の野蠻への転落と見、他の者は試練として歓迎するかもしれないが、それよりもいっそう重要なことは、根源的な諸力のまだ制御されぬ新たな流入が、我々の世界を占領したということを見ることである。疲労がまだ残っているかぎり存続可能であるにすぎない時代遅れの秩序の欺瞞的な安全の下においても、これらの諸力があまり

にも近くにあり、またあまりにも破壊的であるので、たとえ粗雑な眼力であっても、それらを見逃すことはありえない。それらの形式は、いわゆる平和の時期にも不断に、熱狂する群衆の中に火山のごとく地表を突き破って現われる、アナルヒーのそれである。

ここに至ってなお、このような経過が旧式の秩序によって制御されうると信じる者は、破滅を宣告された敗者の部類に属する。むしろ異常なものを組み込んだ新たな秩序の必然性が明白となる。この秩序は、危険なもの排除の上に案出されるのでなく、むしろ生と危険との新たな婚姻を通じて生み出される。

あらゆる徴候がこの必然性を示唆しており、そのような秩序の内部では労働者に決定的な地位があてがわれることは明白である。

#### 原註

(1) 今日安全保障がまさしくいわゆる戦勝国によって、とりわけ市民的な勢力の典型たるフランスによって要求されていることは、全く偶然ではない。本当の勝利の特徴は、その反対に、安全保障を分け与える、すなわち自ら安全を十二分に確保していることで、他者に保護を与えうる、という点にある。

労働世界の内部では自由の要求が労働の要求として登場すること

死と血と大地がおおいに接近してくると、精神はより厳格な特徴とより深い色彩とを帯びるようになる。現存在はそ

のあらゆる層において鋭く脅かされ、ついに、今日ではほとんど忘れられてしまった類の飢餓にまで追い詰められる。この飢餓に対してはどんな経済的規制も役に立たない。それは生を没落か征服かの二者択一の前に立たせるのである。

このような決断に立ち向かおうとする態度は、誰もその全範囲をまだ見渡すことができない破壊の内部で、自由の感得が可能となるあの点に到達しなければならぬ。この自由の特徴は、時代の最も奥深い兆しに参与しているという確信である。この確信が行為と思考とを驚くほど活気づけるのであり、この確信によって行為者の自由が必然的なもの、特別の表現であることが認められるのである。運命と自由とを言わば剣が峰において一致させるこの認識こそは、生がまだ健全な状態にあること、生が自らを歴史的な力と責任の担い手として理解していることの兆候である。

この洞察が存在する場合に、根源的なものの侵入は、移行を内に孕んだあの没落の一つとなる。炎が既存の事物をより深くより冷酷に破壊すればするほど、新たな攻撃はいっそう活発で屈託も遠慮もないものとなる。ここではアナルヒーが、絶滅の内部において進んで自らを試そうとする破壊されざるものを検証する、試金石となる。アナルヒーは多くの夢が立ち現れる夜の混乱に等しく、そこから精神は新しい力を得て新たな秩序へと自らを高めるのである。

しかしながら不屈の情熱と強く直接的な衝動との回帰が最も鋭い意識の景観の中で果たされること、そうして生の手段と生の諸力との、予想もされずまだ試されたこともない相互的な向上が可能となること、まさしくこのことが、今世紀にその最も固有の相貌を与えるのである。かつてある預言者的な精神がルネサンスの諸形態に即して描き出そうとしたこのイメージが初めて明瞭なものになるのは、大戦の本物の兵士、敗れざる兵士においてである。地球の新たな相貌をめぐって戦いが行なわれた大戦の決定的瞬間に注目するならば、この兵士は、原始世界の存在であると同時に最も冷静で最も無慈悲な意識の担い手として理解されうる。ここで情熱の線と数学の線とが交差するのである。

精密機器を通じて燃料を供給される地獄の炎の只中で、出来事があらゆる問題設定を超え、またそれらから独立して

意義を持ったことが、今ようやく辛うじて詩人の力によって示されようになると同様に、労働世界に対する労働者の本質的な関係を認識することは、非常に困難である。戦場の炎の光景は労働世界の軍事的な象徴である。

たしかにこの世界を解釈しようとする努力には事欠かないが、しかしこのような解釈を期待できるのは、特別な種類の弁証法からでもなければ特別な種類の関心からでもない。これらの努力はすべて、その翼をまだ広げきっていない、ある存在を引き合いに出している。しかしそれにもかかわらず、すでに部分的戦闘においてすらどれほど明晰な悟性、どれほど多くの信仰、どれほど大量の犠牲が費消されたかを見ることは、衝動的な光景である。このような光景は、これらの攻撃のどれもが作戦全体の中にたしかにその役割を有しているという前提に立つてのみ、耐えうるものとなるように思われる。そして実際どの攻撃も、たとえそれが盲目的に遂行されるものであれ、まだ形の定かでない素材から、予め形を与えられているこの時代の特徴のどれか一つをいっそう鋭く彫り出す、鑿の一彫りに等しいのである。

苦境と危険の度合い、古い結合の破壊、どんな活動をも捕える抽象性と専門化とテンポは、個々の持ち場を互いにくすまず鋭く切り離し、人間の心中に、意見と出来事と関心の解きほぐしがたい藪の中に置き去りにされているという感情を育む。このような中で理論体系、予言、信仰への勧誘などとして提示されるものは、——光と影を一時的に分離しながら、その直後により大きな不安感、いっそう深い闇を後に残す——サーチライトの煌きに等しい。これら全ては新たな種類の区分にすぎない。意識がこの区分を存在にあてがったとしても、それによって本質的にはほとんど何の変化も生まれない。もっとも驚くべき体験の一つは、時代のいわゆる精神的指導者たちと、時代がこの指導者たちに関わりなく有する高度の方向性と合法則性を知ることである。

というのも、こうしたこと全てにもかかわらず、このような混乱の基礎には、ある公分母が存在するからである。もちろんその本質は、浅薄な協調意志が夢想する類のものと非常に異なっている。この我々の世界の意味に対する信仰

は、必要不可欠のものであり、それも、——どのような性質のものであれ——戦闘態勢を弱めるためどころか、むしろその反対に時代の実際の力によってこの戦闘態勢を強化するためにこそ必要不可欠のものである。しかしそればかりではなく、それはまた、なお未来を持つあらゆる態度の特徴でもある。いかなる回転軸も見出せないような、外見上は純粹に力動的な状態の只中において、安全がもちろんどこよりも達成困難であることは事実であり、またうわべだけの自惚れと威勢のよいポーズを示した一世代の後では、そのことはむしろ歓迎すべきことでもある。

自由が感得されうるのは、苦悩の時点においてではなく、むしろ仕事の時点、世界の行動的な変遷の時点においてである。本当の力の担い手なら、たとえどこに配置されていようと、自分が、経験的な状況を超え、利害を超えて、とくきおり自らの空間と自らの時代とにその最も深いところで結ばれているという確かな手応えを感じるにちがいない。この参与、現存在がほんのひととき味わうこの不思議な苦い幸福は、現存在が自然の素材のひとつであるばかりでなく、歴史の素材のひとつでもあること、現存在が自らの任務を認識することの徴候である。現存在が活動〔Work〕の一端を構成するというこの事実は、もちろん、境界に、つまり創造的な力が時空間的構造の中に流入してくる、あの縁にあまりにも近接しているので、大きな距離のイメージにおいてしか目に見えるようにはならない。

一七

こうして、ひょっとしたら没落した生活統一体の証言として我々に遺された廢墟を観察するときほど、精神が活動の意義にはつきりと感動を覚えることはないかもしれない。その勝利が破壊されざるものへの問いを呼び起こすような破壊は、単なる破壊ではない。この問いは、——久しく見捨てられてはきたが、それにもかかわらずその意義は、我々が



十分感じ取るように、消滅することがありえない——この活動場〔 Werkstätten 〕の秘められた真価に向けられているのである。

過ぎ去った時代の粉々に砕けたシンボルを包み込む沈黙の中から、その時代の物音が、あたかも寄せては返す波に晒されてきた貝殻の中に海の全体が含まれるような仕方、大きな隔たりを越えてなんとはなしに耳に迫ってくるように思われる。その名前さえ忘却の淵に沈んでしまった諸都市の遺物を鋤で掘り返すとき、我々がじっくり聞き取るうとするのは、まさしくこの物音なのである。

木蔭の下や荒野の砂中に埋もれるこれらの石は、権力者たちの力の記念碑であるばかりでなく、名も無き労働の、ここに費やされたごくわずかな手仕事の記念碑でもある。これらの石のいずれにも、忘れ去られた石切り場の喧騒、はるか昔の陸路や海路の危難、港町のごった返し、職工長の構想、賦役の重圧、遠い昔に消え失せた種族の精神や血や汗が収められている。これらの石は、めったに白日の下に晒されることのない生活のより深い統一性の象徴なのである。

それゆえ歴史との内的関係を有する精神はいずれも、自らがこれらの場に魅せられるのを感じる。それらを前にするとき、悲しみと誇りが不思議な仕方に入り混じる。すなわち、あらゆる努力の儂さに対する悲しみと、それにもかかわらず自らが不滅なるものに属することを、繰り返し自らの象徴において表現しようとする意志への誇りとが、それである。

このような意志が、たしかに我々の心と仕事の中にも生きているのである。

このように時間の境界で言わば一つに融合され、諸々の目論見の応酬を通じて純化されたように見える意志の肖像を、我々は次に、空間の境界でも拾い集めてみよう。

我々が生活する大都市は、当然ながら我々の表象においては、考えうるあらゆる対立の焦点として存在する。二つの町並みは、北極と南極の間よりも互いにさらに遠く隔たっていることがありうる。個々人の間の、**通行人**の間の関係の冷たさは尋常でない。ここには、収益、娯楽、交際、経済的政治的権力をめぐる闘争が存在する。どの建物も、特定の決定に基づき、特定の目的のために建てられている。諸々の様式が多様な仕方に入り組んでいる。すなわち古い礼拝所が駅舎や百貨店に囲まれており、郊外では工場や運動場や高級住宅街が広がる中にまだ農家が点在している。

さてこの全体は、それがいかなる方法によって論じられ、いかなる問題設定の下に置かれるかに応じて、様々な仕方で解釈されうる。それは、疑いもなく生産の場であり、また消費、搾取、社会的諸関係、秩序、犯罪、その他任意のあらゆる事柄の場でもある。

機能的に相互に結びついている個々の科学はいずれも、この混合物に対して自らの概念を共通の基礎として宛がうことが出来るし、必要に応じて新しい科学が日々成立しもする。思考の体系から一ペニヒ硬貨に至るまでのあらゆる事柄の全体が、社会学者にとっては社会学的であり、生物学者にとっては生物学的であり、経済学者にとっては経済学的である。このような絶対主義は、——概念がそれ自体正確であること、すなわち論理の法則に従って形成されていることを前提とするならば——概念的な見方の反論の余地なき特権である。

しかし他方で、そのような大都市に住むのは、自らの状態を抽象的な見方でなく直接的な見方によってしか判断するこ

とができない幾百万の人々である。自らの実存の目的に関して彼らが述べる言葉は、それに応じて各人各様である。最後にここでは芸術的な解釈を追求する多くの試みも随意に生じるばかりでなく、人間くさい喜劇へのこうしたあらゆる寄与が、今度は観念論やロマン主義や唯物論の諸学派の様々な処方箋に従って生み出されることもまた可能なのである。しかしこのくらいで十分であろう。細分化の際限のない可能性はあまりにもよく知られている。能力というものは、細分化を放棄する術を心得ているかどうかという点で、そのレベルが推し測られるものである。

さて、これまでのところ我々の持てる手段で到達可能な距離よりも一層遠いところから、例えばあたかも月の表面から望遠鏡で観察するような仕方、この都市を思い浮かべてみよう。このように大きな距離を隔てて見れば、目標や目的の多様性は一つに溶け合ってしまう。観察者の関心は、下方の地球上にいる個々人が一部分として全体に対して持つ関係よりも、どこことなく一層冷静であると同時に一層熱くもあり、いずれにせよ後者とは異なっている。そこに見えるものは、ひよっとしたら、ある大きな生命から栄養を摂取していることが推測されるような様々の徴候を示す、ある特別の構造のイメージかもしれない。この場合、この構造を細分化するという考えは、個々人にとって顕微鏡を通して自分を見る、すなわち細胞の総和として自分を見ることが概して思いもよらぬことであるのと同様に、思いもよらぬことなのである。

宇宙論的な距離を通じて諸々の運動の戯れから引き離された眼差しにとつて、ここではある**統一**体が自らの空間的な肖像を創り出しているということが見逃されることはありえない。このような観察法が、生の統一性をその最も平板な可能性において、つまり足し算として理解しようとする努力から区別されるのは、創造的形成物、すなわちあらゆる対立にもかかわらず、もしくはあらゆる対立を契機として生じる活動を把握することによってである。

ところで、人間には自分の時代を——例えば電動機械や速射砲を見れば、時代の秘められた意味が分かるような——考古学者の目で観察することが許されていないことを、我々はもちろん知っている。同様に我々は、我々の空間を幾何学の形成物として、ある隠された座標系の作用と反作用として直接洞察する天文学者でもない。

個々人の態度は、彼がその逆の状態、すなわち最前線の戦闘＝労働位置に置かれることによって、むしろ重荷を負わされている。この位置を堅持し、それにもかかわらずそこに埋没しないこと、運命の素材であるばかりでなく、運命の担い手でもあること、生活を必然的なものの戦場としてだけでなく、自由の戦場としても理解すること、これこそ、我々がすでに英雄的現実主義として特徴づけた能力である。この能力、極限まで脅かされた一世代のこの本当の贅沢こそは、我々の時代が我々を参加させる不思議なドラマ、すなわちアナルヒッシュな敵意に満ちた空間の只中で統一的な指導層が成長し始めるドラマの基礎を成すものである。

個々人が自らを労働世界の一員と感じるかぎり、彼の英雄的な現実観は、彼が自らを労働者の形態の代表として理解する点に表明される。この形態を我々は、別種のどんな可能態とも区別されるこの我々の世界の最も内奥の担い手、活動的であると同時に苦悩する中核的実質として、さきに示唆した。近代の権力闘争が様々なニュアンスにおいて展開してきたような諸々の実用イデオロギーの間に、人目を引く一致が存在することも、この実質を代表しようとする秘められた意志から説明される。それゆえ、労働者運動たろうとする主張を断念できるような運動はほとんどなく、社会的という言葉が最初の一文に見出されないような綱領は全く存在しないのである。

見られなければならないことは、ここで、経済、同情、抑圧の混合物の彼方、無産階級のルサンチマンの彼方に、権

力意志がますます明瞭にその姿を現わし始めていること、あるいはむしろ、生活のあらゆる領域において自らの明白な表現を闘争の中に追求する新しい現実がとうに存在していること、これである。意志が実験のために用いる定式化が多様であることは、そもそも意志を表現しうる形式がただ一つしか存在しないという事実と比べれば、重要ではない。

意味をもっぱら目的として、統一性を数としてしか理解できない、狡猾な集票家、自由の小売商、権力の道化師は、労働世界の只中で自由が現れる際にとらざるをえない、あの新しい姿をぼんやりと予感するとき、不安に陥れられる。しかしながら彼らは、——労働を悪として描きさえし、聖書に説かれる災いを搾取する者と搾取される者との経済的関係に翻訳する——墮落したキリスト教の道徳的図式にまったく依存しているので、自らが自由を否定形としてしか、何らかの災厄からの解放としてしか見ることができないことを実証している。

しかし労働者という名称が階級章の意義を持つ世界、労働がその最も奥深い必然性として理解される世界の内部では、自由がまさしくこの必然性の表現として現れること、言い換えれば、ここでは自由のどんな要求も労働の要求として現れること、このこと以上に明白なことは何もない。

自由の要求がこのような形で登場するとき初めて、労働者の支配について、労働者の時代について語る事が可能となる。というのも、重要なことは、新しい政治的ないし社会的階層が権力を掌握することではなく、むしろあらゆる偉大な歴史的形態にひけを取らない新しい人間性が権力空間を意味深く満たすことだからである。それゆえ我々は労働者のうちに新しい身分や新しい社会や新しい経済の代表を見ることを拒む。労働者は無か、それともそれら以上のもの、すなわち自らの法則に基づいて行動し、自らの使命に従い、特別の自由に参加する、独自の形態の代表であるかの、いずれかだからである。生活態度のどんな細目も騎士的な意味を帯びているという点に、騎士の生活が表現されたのと同様に、労働者の生活は、自律的で、その自己及びその支配の表現であるか、さもなければ時代遅れの諸権利、過ぎ去っ

た時代の味気のない享受に関与しようとする努力以外の何ものでもないかの、いずれかである。

このことを理解できるためには、もちろん、因習的な労働観とは別の労働観に通じていなければならない。我々が知らねばならないことは、今日全ての政党が労働者政党を自称しているような仕方ではなく、むしろその名に値するような労働者の時代には、労働として理解されないものは何も存在しえないということ、これである。労働はこぶしや思考や心臓のテンポであり、昼夜の生活であり、学問、愛、芸術、信仰、礼拝、戦争である。労働は原子の振動であり、星辰と太陽系を動かす力である。

このような要求や、まだ語られるべきその他多くの要求、とりわけ意味付与の要求は、成長しつつある支配層の特徴である。昨日の問題設定は、いかにして労働者が経済、富、芸術、教養、大都市、学問への参与を勝ち取るか、であった。しかし明日の問題設定は、これら全ての事柄が労働者の権力空間においてはいかなる外観を呈さざるをえないか、またそれらにいかなる意義が割り当てられるか、ということである。

それゆえ労働世界内部における自由の要求はいずれも、労働の要求として現れる限りににおいて可能となる。それが意味することは、個々人の自由の程度が、彼が労働者である程度と正確に一致する、ということである。労働者であること、歴史の中に登場しつつある偉大な形態の代表であることは、運命によって支配の座に就くことを定められた新しい人間性に参与することを意味する。新しい自由のこのような意識、決定的な場に立つという意識が、思考の空間においても、唸りをあげる機械装置の背後や機械的な都市の雑踏の中でも、同様によく感じ取られるということとは、はたして可能であろうか。我々は、これが可能であるということを示す徴候を知っているばかりでなく、これがあらゆる本物の介入の前提であること、そしてまさしくここに、かつていかなる救世主も夢想だにしなかったような変革の中心点があることを、信じてもいるのである。

いかなる場であれ、人間が自らを支配者として、新しい自由の担い手として見出す瞬間に、人間の境遇は根本から変わる。このことが理解されるならば、今日ではまだ求めるに値するとされている非常に多くの事柄が、取るに足りないものに見えるようになる。予見されることは、純粹な労働世界においては個々人の負担が減少せず、それどころかかって増大するであろうこと、しかし同時に、それに対処できる全く別種の力が解き放たれるであろうこと、これである。新しい自由意識は新しい地位関係を設定する。そしてここには、そもそも幸福について語るべきであるとするならば、断念の心積もりを一層整えた、より深い幸福が秘められているのである。

## 二〇

極度の窮乏の只中で生の偉大な任務に対する感情が育つところ、そして我々が若干のイメージを与えようとしたこの感情が**現に**育っているところでは、尋常でない事柄が準備されているのである。

徹底的に合理化され道徳化された世界の荒野において自己を形成する世代の厳格な規律を見るならば、プロイセン主義の発展との対比は容易に思いつくところである。これに関して言わなければならないことは、プロイセン的な義務概念がその知性的な性格において完全に労働世界に導入可能なものであること、しかし後者において提出される要求の程度は前者におけるよりもはるかに広範囲なものであること、これである。世界中で新しい努力が観察されるところではどこでも、プロイセンの哲学が見出されることは、全く偶然でない。

プロイセン的な義務概念において実行されることは、——行軍のリズム、王位継承者に対する死刑宣告、規律を身につけた貴族と訓練された傭兵とによって初めて可能となった堂々たる戦いなどの例を通じて想起されるような——根源

的なものの抑制である。

しかしながらプロイセン精神の唯一可能な継承者、すなわち労働者精神は根源的なものを排除するのではなく、むしろ包含する。それは、アナルヒーの学校をくぐり抜け、旧来の絆の破壊をくぐり抜けてきたがゆえに、自らの自由要求を新しい時代と新しい空間において、そして新しい貴族制を通じて実現しなければならないのである。

この経過の特色と規模は、権力に対する労働者の関係に依存している。